

5 - 2 島根沖の海底地形，地質構造

Submarine Topography and Geological Structure off Shimane

海上保安庁 水路部

Hydrographic Department, Maritime Safety Agency

水路部では昭和50年10月-11月に，大陸棚の海の基本図整備のため島根沖の海底地形，地質構造，地磁気，重力の調査を行なった。

調査海域は，日本海の南西部に位置し，東側の大和海盆，隠岐堆（海嶺），隠岐舟状海盆と，西側の対馬海盆に挟まれる海域である。調査要領は次のとおりである。

- 1) 調査測線の方向は東西方向で，測線間隔は約2海浬である。
- 2) 測位はロランCを主とし，それにロランA，レーダー，NNSS，陸測を併用した。
- 3) 測深は，浅海用音響測深機（NS77），中深海用音響測深機（NS16A）を使用した。
- 4) 音波探査は，エアガン方式の深海用連続音波探査装置を使用した。
- 5) 調査船は，測量船「昭洋」である。

1. 海底地形（第1図）

調査海域には，隠岐諸島から北に向って延びる半島状の大きな地形の高まりがあり，調査海域の大部分を占めている。海域の地形は，大陸棚，縁辺台地（岩淵 1968），大陸斜面に分けられる。区域の北西縁には神藤礁がみられる。

- 1) 大陸棚は，島根沿岸から隠岐諸島周辺に認められる。外縁水深は，隠岐島後北方で150m～160m，島前西方で135m，島前から日御岬沖では140m～150m，隠岐諸島南東縁から島根半島沖では90m～110mである。
- 2) 縁辺台地は，大陸棚の沖側に分布する水深170m～500mのスムーズな面である。この面は，隠岐諸島から北に向って約140km延び，幅は約60kmである。この面の外縁水深は，東側で300m～500m，西側で400m～500mである。
- 3) 縁辺台地から東西両側の海盆部に向って下る大陸斜面の上部には，海盆部に向って落ちる落差約100m～200mの海底崖が分布し，その沖合に地形上の小起伏がみられる。特に，この海底崖は対馬海盆側で顕著である。
- 4) 神藤礁（堆）は，堆頂水深137m（1958年俊鷹丸の報告では135m）であり，堆頂部には水深170m～180m，220m～240mの二段の平坦面がみられる。

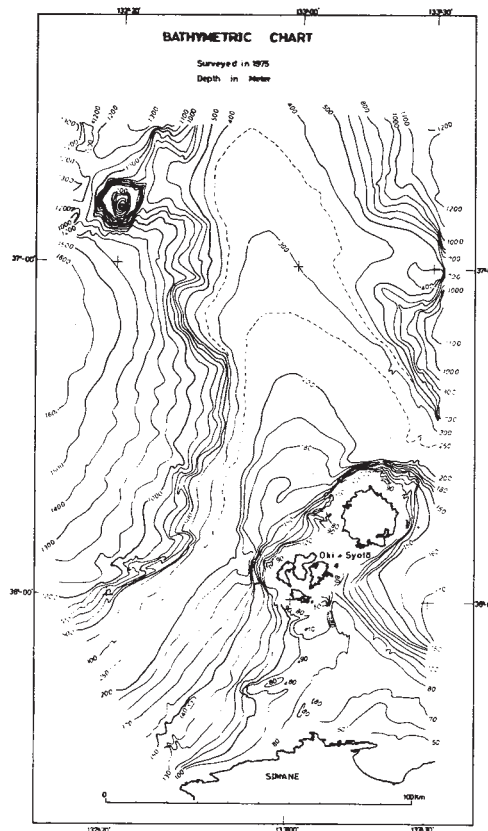
2. 地質構造（第2，3図）

この海域の地層は、音波探査記録上で上位から A, B, C, D, E 層に区分される。

主な構造軸は、北東-南西ないし東北東-西南西方向および、これに斜交する北北西-南南東方向に大別できる。このうち前者は、区域外の大和海盆、隠岐堆、隠岐舟状海盆の延び方向とほぼ同じである。

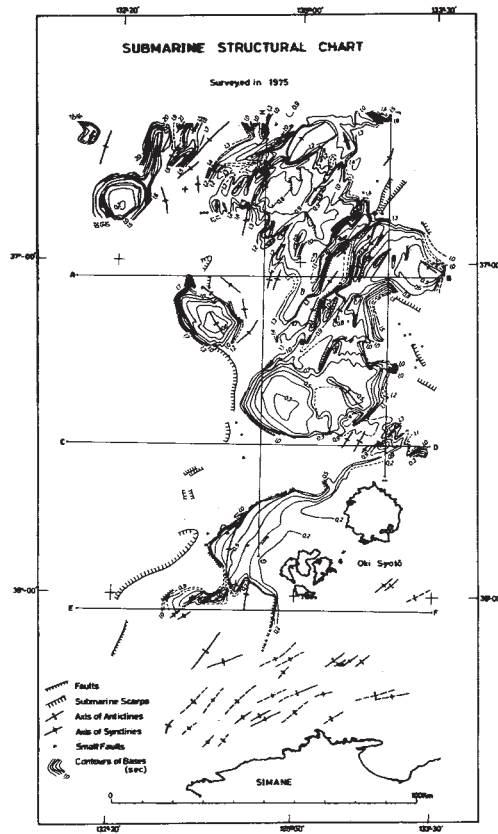
- 1) 隠岐諸島と島根沿岸間の大陸棚上には、北東-南西から東北東-西南西方向の C 層の褶曲が顕著である。
- 2) 隠岐諸島の北西および南西縁には、同島を構成する E 層の北東-南西方向の断層が推定される。
- 3) 隠岐諸島北方の縁辺台地下は、北東-南西方向および北北西-南南東方向の断層によって分断された E 層(基盤)の高まりとなっている。とくに、ほぼ円錐形に独立した基盤の高まりは、隠岐島後から北北西方向に配列し、区域北西端の神藤礁(堆)から区域外の竹島、鬱陵島へと半円状に続き、対馬海盆の北東縁を形成している。
- 4) 大陸斜面上部の海底崖は、縁辺台地の表層が海盆に向って撓曲する肩の部分に形成されており、縁辺台地の外縁付近には表層を切る落差数 m の小断層がみられる。海底崖の基部では表層の層理が乱れた地形上の小起伏が形成されており、海底地すべりや崩落が推定される。

(登崎隆志)



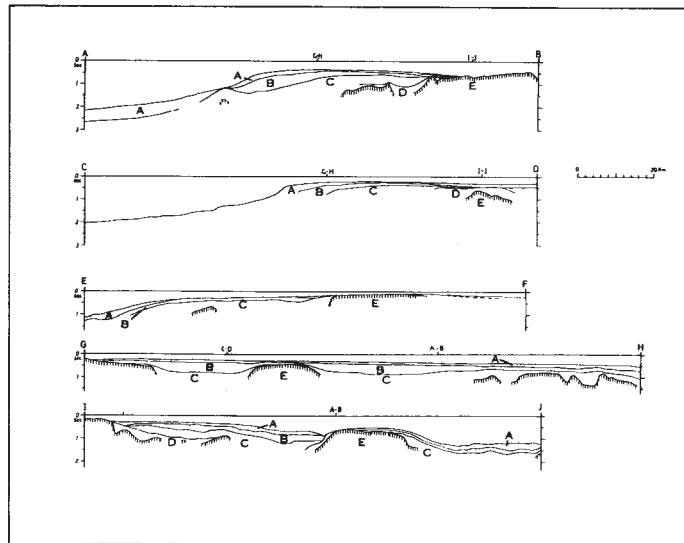
第1図 海底地形図

Fig. 1 Bathymetric Chart off Shimane. unit : meter.



第2図 地質構造図

Fig. 2 Submarine Structural Chart off Shimane



第3図 地質断面図

Fig. 3 Submarine Structural Chart off Shimane.